

次の政治局常務委員は誰か

次世代指導者たちの素顔

三菱UFJ証券（香港）産業調査アナリスト
稲垣 清
いながき きよし

来年秋の党大会で指導部が交代する中国。これから一〇年の難しい局面を担う次のリーダーたちを予測する！

一九四七年生まれ。慶應義塾大学大学院経済学研究科修士課程修了、三菱総合研究所入社。三菱総合研究所香港駐在事務所長、香港支社長を経て現職。著書に「面白いほどわかる！いまの中国」「二目どわかる中国進出企業地図」などがある。

中国共産党第一八回党大会は、二〇二二年下半期に開催する。次期大会では、トップである総書記以下、政治局常務委員のうち、大幅な入れ替えが予想されるが、そのトップを選出する中央委員会人事は、すでに地方書記・省長の入替えのなかで進行している。政治局常務委員は七人の入れ替えが有力視されており、焦点は当然のことながら、誰が入局するかである。

一八回党大会の政治局常務委員は九人として、筆者は、習近平、李克強、王岐山、劉雲山、李源潮、汪洋、張高麗、俞正声、薄熙来を「当確」として有望とみるが、このほかには、現政治局員では、劉延東、張徳江らの名前が挙がっている。中央委員からの「大抜擢」の可能性は少ないであろうが、名前を挙

げるとすれば、周強（湖南省書記）、胡春華（内蒙古書記）、孫政才（吉林省書記）らを取りざたされている。三人とも「一六〇後」（一九六〇年代生まれ）の「次の次」の有望リーダーである。

政治局常務委員に選出されるためには、いくつかの条件が必要である。①「留七下八」、つまり、六七歳は就任ないし留任可、六八歳は引退、という年齢制限である。②次に、「地方」方面の勤務経験、地方勤務経験の有無とできれば、内地地方の経験が重要なポイントとなる。③「長老の支持」、江沢民に代表されるように、前期の政治局常務委員経験者の支持を得られることが望ましい。④胡錦濤（共青团）の支持と次期総書記習近平（太子党）の意向。こうした条件に照らし合わせた結果が上記九人



習近平

2011年10月の共産党結成90周年式典での習近平・国家副主席（ロイター／アフロ）

である。総じて、胡錦濤（共青团）の力より、江沢民（太子党）の力が強いとみる。

政治局常務委員は、党内地位により国家重要ポストを兼務す

る慣わしである。総書記は国家主席、軍事委員会主席を兼ねる。二〇二二年党大会で、習近平が総書記に選出されるのは確実として、焦点は胡錦濤が軍事委員会主席の地位にとどまるかどうかである。胡錦濤の前任の江沢民は、〇二年に総書記の地位を胡錦濤に譲ったものの、中央軍事委員会主席のポストは〇四年まで維持した。江沢民の前任者である鄧小平の前例に従ったのみならず、江沢民は今日でも、いわゆる「上海閥」の代表的存在として党内での影響を残している。

胡錦濤が二〇二二年の党大会以後、軍事委員会主席の地位を維持するか、するとすれば、いつまでかが注目される。なお、胡錦濤は一三年の全人代で、国家主席（国家軍事委員会主席）の地位も憲法の「三選禁止」により辞任することが規定路線である。

総書記に続くナンバーツーは、現在は全大代委員長の呉邦国である。江沢民時代の二期は李鵬総理、二期は同じく李鵬であるが、兼務職は総理から全人代委員長に転任した。つまり、兼務職よりも党内序列が優先するのが伝統である。二〇二二年の党大会では、習近平に続く、ナンバーツーは李克強となり、兼務職は一三年に行われる国家人事での総理、というのがほぼ決定とみてよいであろう。残る七人の候補者の兼務職からみると、李克強と総理の椅子を争う王岐山は、最終的に常務副

総理となろう。劉雲山は現在のイデオロギー担当である李長春の後任となろう。李源潮は党内では書記処担当であるが、兼務職をあえて当てはめるかどうかが注目される（紀律検査委員会書記あるいは国家副主席との説もある）。

汪洋と薄熙来は、何かと比較される候補者であるが、政治局常務委員の残り一席を両者が争うという構図ではない。現時点では、両者とも有力候補であろう。兼務職が問題である。両者ともに、地方書記、しかも重慶書記の前任者と現書記という立場であり、汚職・腐敗取り締まりの強化を行っている。紀律検査委員会書記（現書記賀国強）ないし政法委書記（周永康）の地位がふさわしいといえる。また、両者は国家副主席に就く可能性もある。兪正声は候補者の中で最年長（二〇二二年で六七歳）である。年齢的にはギリギリであるが、病氣から回復し、その健在ぶりを誇示した江沢民のバックがあり、入局する可能性が高い。

北京の消息筋によれば、江沢民前総書記は、ある外国人との会見の際、自ら「兪正声同志はすばらしい」と絶賛したとのことである。この江沢民の支持と上海万博の成功を引き下げての入局が有力視される。兼務職は、一期にとどまる可能性が高いが、全人代委員長、政協主席、国家副主席あるいは、政法委書記が候補であろう。

政治局常務委員候補を年代からみると、「四〇後」（一九四〇年

代生まれ）が王岐山、劉雲山、劉延東、兪正声、薄熙来、張徳江、張高麗の七人である。「五〇後」（五〇年代生まれ）は習近平、李克強、李源潮、汪洋の四人で、人数では「四〇後」が上回る。しかし、「六〇後」（六〇年代生まれ）の三人が、「階級特進」（中央委員からの抜擢）によつて入局する可能性は少ないとみる。

新指導部有力者に迫る

習近平

習近平は、中国共産党の元老で広東省書記、副首相、全人代副委員長などを歴任した習仲勲の息子である。中学校は高級幹部子弟校である「八一中学」、清華大学と大学院を卒業し、法学博士の学位を取得している。なお、習近平夫人の彭麗媛は解放軍総政治部歌舞団所属の著名かつ国家一級の歌手であり、軍閥では少将の肩書きを持つ。習近平を知らない庶民も、彭麗媛は知っている。

習近平は高級幹部の子弟（太子党）であるが、身の振る舞いは謙虚「平凡」との評価がもつぱらであり、高級幹部の特権を振りかざさないことでも評価が高い。いくつもの逸話があるが、そのひとつを紹介すると、浙江省書記に就任した際、省外視察の送迎をやめたこと、外国人を招いた食事もワインだけで、簡素化

を提案している。

李克強

共青团中央第一書記出身であり、早くから胡錦濤の後継者の有力候補として注目されていたが、二〇〇七年十一月の党大会では、政治局常務委員には昇格したものの、大方の予想に反して、習近平より序列が下となった。次期政権交代年となる二三年には温家宝の後任総理に就任する可能性が高い。

北京大学卒業後、ハーバード大学への留学のチャンスもあつ



李克強

2011年8月、香港の政財界要人を訪問中の李克強・副首相 (AP/アフロ)

だが、共青团への道を選んだ。同級生には米国留学組も多い。二〇一二年八月の香港訪問時、香港大学創立二〇〇周年記念式典での演説の中で、一部英語によるスピーチを披露し、その一端を垣間見せる場面もあつた。

王岐山

王岐山のことを、西側報道機関は「問題処理専門家」(Problem-solver)と呼ぶ。二〇〇〇年の広東省副省長として、破綻した広東省国際信託投資公司(GITIC)問題の処理、〇三年の新型



王岐山

2011年9月、英中経済対話に臨む王岐山・副総理 (ロイター/アフロ)



李源潮

2011年6月、北朝鮮を訪問する中国共産党代表団。写真手前左が李源潮・中国共産党中央政治局委員、隣に立つのは金正日・総書記(Landov/アフロ)

肺炎(SARS)蔓延に際しては、北京市長として問題処理に当たったことから、そう呼ばれている。

王岐山の別の呼び方で定着しているのが、「太子党」である。

正確には、「金亀族」(娘婿派)であり、岳父が元副総理の姚依林(一九二七～一九四年)である。

二〇一二年の党大会で、政治局常務委員に昇格する可能性が高いが、焦点は兼務職である。温家宝総理の後継とみる向き

もあり、李克強、汪洋(広東書記)らとの争いとなる。

汪洋

汪洋は第五世代を代表するリーダーの一人であり、安徽省出身である。一七歳の時、父親を亡くし、母親を助けるため、中卒で食品会社に就職。習近平、李克強ら第五世代の有力リーダーが清華大学や北京大学を卒業しているエリートであるのに対し、汪洋は就職後、ようやく通信教育で中国科技大学を卒業した、いわば筆冑(ひつご)人である。

銅陵市長時代、汪洋の発表した「目覚めよ、銅陵!」という論文がある。この論文を読んだ鄧小平が、「有能な人材」と褒め、朱鎔基が「若いのに大胆」と褒めたたえたといわれている。

李源潮

人呼んで中国の「人事部長」。中共老幹部李幹の息子で、共青团中央出身であり、胡錦濤総書記が共青团中央書記時代に、その下で働いていた。共青团を中心として、文化・宣伝関係の要職を経て、二〇〇〇年から江蘇省で活躍。〇二年には中央候補委員に選出され、江蘇省書記に就任した。〇三年には日本を訪問し、小泉首相(当時)にも会っている。一七回党大会では中央候補委員から中央委員を超えて、政治局員となり、さらに中央

表 党トップ人事——政治局常務委員候補予測

	生年	現在の地位	2012年党大会（兼務職）	備考
習近平	1953年	政治局常務委員 国家副主席 中央軍事委副主席	総書記 国家主席 軍事委副主席（主席）	当確
李克強	1955年	政治局常務委員 國務院副総理（常務）	政治局常務委員 （次期総理）	当確
王岐山	1948年	政治局員 國務院副総理	政治局常務委員 （次期常務副総理）	当確 総理候補でもあるが、1期のみ
劉雲山	1947年	政治局員 党中央宣伝部長	政治局常務委員 イデオロギー担当	当確
李源潮	1950年	政治局員 党組織部長	政治局常務委員 書記処書記（筆頭）	当確
汪 洋	1955年	政治局員 広東書記	政治局常務委員 （国家副主席）	当確
張高麗	1946年	政治局員 天津書記	政治局常務委員 （政法委書記）	当確
張徳江	1946年	政治局員 國務院副総理	政治局常務委員	有望とみる向きも多い
俞正声	1945年	政治局員 上海書記	政治局常務委員 （全人代委員長）	当確 （兼務職は流動的）
薄熙来	1946年	政治局員 重慶書記	政治局常務委員 （紀律検査委員会書記）	当確 全人代委員長、 政法委書記の可能性もある
劉延東	1949年	政治局員 國務委員	政治局常務委員	女性の常務委員は過去になし

組織部長に就任し、地方人事を断行、精神的に国内を飛び回っている。一二年一八回党大会において、政治局常務委員への昇格が確実視されている。

「次の次」は誰か

一九六〇年代（五〇歳以下）の高官は中央・地方合わせて一〇〇人近くいるが、この中で、「次の次」の有力候補が、吉林省の孫政才（六二年生まれ）、内蒙自治区の胡春华（六三年生まれ）、湖南省の周強（六〇年生まれ）の三人であり、さらに、省長クラスでは、新疆自治区主席の努爾・白克力（六二年生まれ）、福建省省長の蘇樹林（六二年生まれ）、そして河北省長の張慶偉（六三年生まれ）の三人だけである。しかし、「六〇後」の有力候補が二〇一二年の党大会で常務委員まで上がる可能性はない、とみる。

周強は一九六〇年生まれ、七八年に湖北省重慶にある西南政法大學に入学、修士課程を終え、司法部に入る。当時の司法部長蕭楊（前最高人民法院長）の秘書（弁公庁副主任）を務め、法制司長（局長）を経て、九五年から共青团中央に転属する。その後過去の共青团中央書記のキャリアコースと同様に、地方に転じている。

二〇〇七年「中部博」参加のため鄭州滞在中、河南省博物館

において、偶然、湖南省の周強省長に会った。というより、参観中の省長に飛び込み挨拶をしたというのが正確である。しかし、省長はいやな顔もせず、名刺交換と撮影に応じてくれ、次回長沙訪問の折、会見したいという、快く(?)応じてくれた。

胡春华の出身は湖北省五峰（現在、省都の武漢まで四〇〇キロの恩施土家族自治州）、地元の中学を吾の科挙試験（進士）でいえば、「状元」すなわち、首席で卒業し、二六歳で北京大学中文系に入学する。中国の大学入学年齢は一般に一八歳であるから、いわば「飛び級」で入学したわけである。一九八三年に北京大学を卒業、と同時に中国共産党に入党、そして前後二〇年近く勤務することになるチベット行きを志願、自らの運命をすでに決めていたのである。否、二六歳ですでに共産党のトップに立つことを目指していたのかもしれない。

一九八九年チベット騒乱の折には、当時、チベット書記であった胡錦濤の秘書を務め、騒乱鎮圧の功績を担う。この折、胡錦濤の信頼を得、今日まで上り詰めたといえる。

二〇一七年には、胡春华は五五歳、胡錦濤が総書記になった年齢（六〇歳）より五歳若く、総書記になるにはやや早いが、胡錦濤が政治局常務委員になった年齢と同じである。同じ道を歩む可能性はありうる。■